ONODA CLINIC
PATIENTS FIRST

「なによりも患者さまのために」

当院では、「患者様のことを第一に考える」ということを大事にしています。
患者様の不安な気持ちに寄り添い、温かい対応を心がけております。

ONODA CLINIC　twitter　Instagram

当院は、新日本プロレスの
メディカルアドバイザーです。

肌本来が持つ健康的で美しい肌へと導く、ドクターズコスメ「home+」。

HOME PLUS

Life is Beauty,
Beauty is Life

conditment combo -Naturamide-
conditment moisture gel _50g
conditment power essence _100ml
¥9,350 (tax included)

“Stop the COVID-19”
新型コロナウイルスにどう向き合うべきなのか？

A NEW DAWN 2022

新しい夜明け

2022.FEBRUARY

ONODA CLINIC
PATIENTS FIRST

Life is Beauty,
Beauty is Life

©NJPW

新しい夜明けは、きっと来る。

新型コロナウイルス感染症に翻弄される日々が続いています。
私たちはいったい、いつまでこの逆境に耐えなければならないのでしょうか?
先が見通せない状況はもう少し続きそうですが、遠くない将来に、
疲弊した私たちの心に、恵みの雨が降り注ぐことを期待しましょう。
コロナ禍にあっても、前向きに生活を送っているプロレスラーのオカダ・カズチカ選手、
そして、感染症学の第一人者、花木秀明先生に、
日々の思いを語っていただきました。

CONTENTS

Special Dialogue 01
新日本プロレス × コロナ診療のエキスパートによるスペシャル対談
新日本プロレス オカダ・カズチカ 選手 × 医療法人オノダクリニック 院長・理事長 新日本プロレス メディカルアドバイザー 鈇田 徹 先生

Special Dialogue 02
感染症学の権威 × コロナ診療のエキスパートによるスペシャル対談
北里大学 大村智記念研究所 感染制御研究センター長 花木 秀明 先生 × 医療法人オノダクリニック 院長・理事長 新日本プロレス メディカルアドバイザー 鈇田 徹 先生

教えて鈇田先生「コロナQ&A」

新日本プロレスのファンの方必見!
試合を観戦するときに気になることについて、
コロナ診療のエキスパートがお答えします!

会場内でのマスク着用や声援について

Q 会場内ではマスク着用をしなければなりませんか? また、声援はしてはいけませんか?

A 新型コロナウイルスは「エアロゾル感染≒空気感染」が主とされています。マスク(不織布)着用であれば感染をある程度防ぐことができるので(100%ではありません)、引き続き、マスクの着用をおすすめします。また、声を出すことで感染の機会が増す可能性もありますので、現時点ではまだ、声援は我慢していただくのがよいでしょう。解除の条件としては、「ウイルスの弱毒化」および「予防と治療の確立」が必要です。

今後の大会感染・生活について

Q 試合会場で注意したほうがよいことはありますか?

A 新日本プロレスのサイン会が復活したことは、大変喜ばしいことだと思います。ただし、新型コロナウイルスは「エアロゾル感染≒空気感染」が主と考えられていますので、マスク(不織布)は必ず着用してください。

ワクチンについて

Q ワクチン接種は受けたほうがよいですか?

A 新型コロナウイルスワクチンの接種がスタートしてからもうすぐ1年になり、いろいろな副作用も多数報告されています。また今後、ブースター接種を行う機会が増えたり、新しいタイプのワクチンが登場したりすることもあると思います。まずはワクチン接種によるメリットとデメリットについてかかりつけ医の先生と相談し、接種を判断していただきたいと思います。

新型コロナウイルス感染拡大防止のために

Help stop the spread of COVID-19

ご理解・ご協力をお願い申し上げます。
Thank you for your understanding and cooperation.

- マスク着用 Wear a mask
- 部屋の換気 Ventilate a room
- 手の消毒 Sanitize your hands
- 距離をとる Keep your distance

新日本プロレス × コロナ診療のエキスパートによるスペシャル対談

Special Dialogue 01

Special Dialogue - New Japan Pro-Wrestling vs. COVID-19 clinical expert.

新日本プロレス
オカダ・カズチカ 選手

×

医療法人オノダクリニック 院長・理事長
新日本プロレス メディカルアドバイザー
鈇田 徹 先生

歓声はなくても、リングを見つめる目と拍手で気持ちが伝わってくる。応援してくださるファンの方に、心から感謝したい。

スポーツ界にも大きな影響を及ぼしている新型コロナウイルス感染症。一時期は開催を中止せざるを得なくなり、再開したあとも、試合が無観客で行われたり、入場制限で観客数が制限されたりと、さまざまな制約が課される日々が続きました。プロレスラーの皆さんの日常ではどのような変化があり、また、その日常のなかで何を考えたのでしょうか？新日本プロレスメディカルアドバイザーである鈇田 徹先生が、オカダ・カズチカ選手にお話をうかがいました。

静かに応援してくれるファンの方にありがたさを感じている

鈇田　コロナ禍のなかで、選手の皆さんの生活も変わってきているのでしょうね。

オカダ　そうですね。選手は全員、常に感染対策を意識した生活を送るようにしていると思います。会場入りしたら検温と血中酸素飽和度測定を必ず行いますし、リングの消毒も行います。練習のときもマスクはつけるし、試合後に外食することもありません。プロレスはコンタクトスポーツなので、感染したままリングに上がってしまったらうつしてしまう可能性は高いですよね。誰もそれは望んでいません。

　地方で試合をするときは、その土地のおいしい料理も食べたいですけどね（笑）。今はお弁当で我慢することも多いです。

鈇田　試合の時は、Call and Responseがなくてやりづらい部分もあると思いますし、ファンの方も声を出さずに応援しなければならないなど、苦労がありそうですね。

オカダ　コロナ前のような歓声はありませんが、お客さんが真剣に試合を見てくれている様子はリングの上からでもよくわかります。みなさんマスクをされていますが、目だけでも気持ちが伝わるんですよね。拍手の音も心に響きます。声を出して応援したい方がほとんどだと思いますが、それを抑えて応援してくださっている、その気持ちがとても嬉しいです。コロナ禍であることが逆に、ファンの気持ちを考えるきっかけになっているともいえるかもしれません。

鈇田　私もコロナ禍になって、講義はすべてオンラインでさせていただいていますが、最初はかなり戸惑いました。まだしばらくは、こうした状況が続くかもしれませんね。

軽症が軽症ではないのがコロナ

鈇田　オカダ選手も感染されましたが、どのような経過でしたか。

オカダ　2021年5月に博多で試合があったのですが、そのときに、一緒に試合をした選手のコロナ感染が判明したんですね。濃厚接触者としてすぐに抗原検査を受け、東京に戻ったあとでPCR検査を受けましたが、結果はいずれも陰性でした。その後はホテル待機をしていたのですが、数日したら自分も発熱して、1週間後には味覚障害が現れました。その時点で再度PCR検査をしたら、そこで陽性であることがわかりました。発熱してから9日目の陽性判定でした。

鈇田　症状はいかがでしたか？

オカダ　熱は39℃くらいまで上がり、味覚障害のほかには喉の痛み、首の痛み、関節の痛みなどがありました。けっこう辛かったですけど、それでも軽症という診断でした。ホテル待機を始めたときは、チューブでも持ち込んで部屋でトレーニングしようと思っていましたが、発熱してからはそれどころではない状態でしたね。

鈇田　その後、1か月ほどで試合に復帰されていましたが、大丈夫でしたか？

オカダ　約1か月休み、いきなりタイトルマッチでの復帰でした。少し喉の違和感が残っていたし、いつもより息が上がった感じもしましたが、感染してもここまで元気になれるということは見せることができたと思います。試合には負けてしまいましたけど。

鈇田　私もコロナの患者さんを多数診てきましたのが、まさか1ヶ月程度で復帰されるとは思っていませんでした。やはり普段からの鍛え方が違うのでしょうか。ハードなトレーニングを日々されていて、自己管理ができているので、細胞性免疫がしっかりされているのだと思います。

感染のリスクは誰にでもある 十分な感染対策の継続を

鈇田　感染されて思うことはありましたか。

オカダ　自分は外食を頻繁にしているわけではないし、むしろ感染対策は十分していたほうだと思います。でも感染してしまった。だから、誰にでも感染するリスクがある病気だという怖さを感じました。マスクをしているから安心とか、ワクチンを打ったから大丈夫とか、決して思わないことが大切です。

　また、自分は軽症でしたが、それでもけっこう辛かったです。数日間はなにもできずに過ごしていました。僕の場合は喉の違和感を除けば症状はすべて短期的なものでしたが、後遺症に苦しむ人もいるようですね。

鈇田　発熱が収まっても、数か月にわたって味覚症状や倦怠感などに苦しむ方もいます。また、患者さんによっては症状や重症度、期間などが異なるので、注意が必要ですね。

新日本プロレス50周年に向けて

鈇田　2022年、新日本プロレスは50周年を迎えます。オカダ選手の抱負をお聞かせください。

オカダ　2020年は我慢の年でした。2021年はようやく兆しが見えて立ち上がることができたので、50周年である2022年は打ち勝つ年にしたいですね。プロレスもそれに似ています。何度もやられて倒れるけど、起き上がってまた戦う、そして最後には相手を倒す、そんな2022年であってほしいと思います。節目なので盛り上げていきたいところですが、コロナが収束していない状況なので難しさはあるかもしれません。でも、ファンの方に喜んでいただける試合をお見せできればと思います。

鈇田　私は2020年1月に東京ドームで観戦して以来、まったく会場に行くことができていません。本当は観戦したいところですが、コロナ患者さんの診療を行っている身なので、万が一自分が感染していたらと思うと足を運ぶのを躊躇してしまいます。2022年は、コロナを気にせずに試合観戦ができる年になってほしいと、切に願っています。また、私も今年で50歳になるので、それも縁かと勝手に思っています（笑）。なにかお役に立てることがあればおっしゃってください。今日はありがとうございました。

感染症学の権威 × コロナ診療のエキスパートによるスペシャル対談

Special Dialogue 02

Special Dialogue - Authority of infectious disease vs. COVID-19 clinical expert.

北里大学 大村智記念研究所
感染制御研究センター長
花木 秀明 先生

×

医療法人オノダクリニック 院長・理事長
新日本プロレス メディカルアドバイザー
鈑田 徹 先生

新型コロナウイルス感染症はまだ予断を許さない。ひとりひとりが感染対策を継続していくことが大切

第6波がやってくると警戒されながらも、新規感染者数は低い数字を維持しており、12月上旬現在、まだ明らかな第6波の兆候は見られていない。感染は収束に向かっているのか?それとも、まだ感染の流行は起こるのか?感染症学の権威であり、新型コロナウイルス感染症にも造詣が深い花木秀明先生に、新型コロナウイルス感染症治療のエキスパートであり、新日本プロレスのメディカルアドバイザーでもある鈑田 徹先生が、鋭く切り込む。

※本対談は2021年12月上旬に収録されたものです

新型コロナウイルスは、自壊の道をたどるのか?

鈑田　花木先生は現在の感染状況をどうとらえていらっしゃいますか。

花木　幸いにして、日本ではデルタ株の流行は抑えられた形ですが、諸外国ではデルタ株以外の変異株による流行も確認されています。そうした株が日本に入ってくれば再び流行が起こる可能性はありますし、日本で変異した株が流行を起こす可能性もあります。まだ油断はできないと考えています。

鈑田　なぜデルタ株の流行は抑えることができているのでしょうか。

花木　1つの可能性として「エラー・カタストロフ」という現象が指摘されています。これは、ノーベル化学賞を受賞したマンフレート・アイゲン博士が50年前に提唱した理論ですが、簡単に言うと、「ウイルスは変異しすぎると自滅する」という考え方です。現在の病原ウイルスはとても速いスピードで増殖しますが、そのスピードが速ければ速いほど複製ミスが起こりやすくなり、そしてある限界を超えると生存に必要な遺伝子まで変異してしまい、ウイルスが自壊してしまうという理論です。

鈑田　私も、その可能性は高いと考えています。しかし、だからと言って感染対策はもうしなくてよいということではないですね。

花木　そのとおりです。先ほども言ったように、今後、デルタ株以外の株が流行することは大いにあり得ますから、感染対策の手は緩めないほうがよいでしょう。

ワクチンや治療法の進歩によって、感染症の脅威は軽減される

花木　鈑田先生は、この流行がどのくらい続くとお考えですか。

鈑田　予測が難しいのがこの新型コロナウイルス感染症の特徴なのですが、まだ数年は警戒が必要だろうと考えています。

花木　ワクチンや治療法がどのくらい進歩するかにもよりますね。いま私たちが接種しているワクチンは、メッセンジャーRNA（mRNA）ワクチンと呼ばれているものですが、有効性を発揮する期間が短いために、ブースター接種が必要と言われています。また、長期にわたる安全性も今後は観察していかなければなりません。従来から使われている不活化ワクチン*が開発されれば、有効性と安全性はさらに期待できるものになると思います。

また、抗ウイルス薬の飲み薬もいくつか登場していますので、そうしたお薬を正しく使うことで、軽症で済む患者さんも増えていくでしょう。感染自体は収束していなくても、緊急事態宣言が発出されるようなことにはならないのではと考えています。

鈑田　ウイルスをゼロにすることは難しいけれど、コントロールはできる状況になってきたということですね。

*不活化したウイルスの一部やウイルスのタンパクを投与することにより、それに対する抗体を体が作れるようにするワクチン

引き続きマスクは必要。そして、空気感染を意識してこまめな換気を。

鈑田　感染の流行から2年弱が経過し、正しい感染対策のあり方も変わってきたような気がします。重要なのは、接触感染よりも空気感染に注意するということではないでしょうか。

花木　おっしゃるとおりです。最近になってようやく、空気感染の重要性が認められるようになってきました。これまでは接触感染が重要とされてきたので、街のいたるところでアルコール消毒が行われていますね。しかし実際は、接触による感染リスクは高くないことがわかってきました。米国疾病予防管理センター（CDC）でも、「普通の清掃で大丈夫」と言っています。

鈑田　接触感染を重視した対策は、練りなおした方がよさそうですね。

花木　そう思います。もちろん、意味がないということではないですよ。例えば病院などは患者さんの飛沫が付着するケースがあるので、そうした場所ではアルコール消毒も有効です。でも、病院とレストランを同じレベルで消毒する必要があるかと言ったら、私はその必要性は低いと考えています。

鈑田　空気感染を意識すれば、引き続きマスクは必要ですね。それから、こまめな換気が大切です。当院でも窓は常に開放していますし、二酸化炭素濃度を常に計測して、院内が密閉空間にならないようにしています。

新日本プロレスファンへのメッセージ

鈑田　今回の対談は、新日本プロレスファンが多く目にします。最後に、ファンの方に向けて、花木先生からのメッセージをいただけますか。

花木　私もプロレスは昔から好きで、テレビ中継は必ず録画をして見るようにしています。コロナの影響で一時期は試合も中止になり、選手の方もファンの方も、つらい思いをされたかと思いますが、再開されていることをとても嬉しく思います。感染対策を十分に行ったうえで、これからも素晴らしい試合を見せていただければと思います。

花木先生と鈑田先生の対談は、第5波が収まっていた2021年12月上旬に行われたものですが、2022年になって第6波が訪れました。そこで、第6波が起こっている現時点における花木先生のコメントをいただきましたので、ここに記載いたします。

第6波がやってきた

年が明け、懸念されていた第6波がやってきました。オミクロンという変異株による急激な感染拡大が起きており、全国的にその脅威にさらされています。

従来のmRNAワクチンの効果は限定的で、あまり効果は期待できないと思われます。しかし、3回目の接種が有無を言わせず行われようとしています。mRNAワクチンの効果は一時的な可能性が高く、3回目、4回目、5回目と、次から次へとワクチン接種へ突き進む可能性があります。一方でワクチン後遺症も報告されています。ワクチンも薬なので、効果もあれば副作用（副反応）もあります。政府もマスコミも一体となり、今は効果のみが過剰宣伝されていますが、副作用（副反応）を丁寧に説明してくれる方はいません。

強力なワクチンを接種されると、体内ではウイルスのスパイク蛋白が大量に作られます。この異物に対して我々の身体は抗体を作るのですが、抗体の設計をミスることがあります。間違った抗体ができた場合は、我々自身の組織を傷つける自己免疫疾患が起こります。また大量につくられたウイルスのスパイク蛋白により、微小血栓や心筋炎、脳内への侵入による副作用などが起こることが報告されています。繰り返されるmRNAワクチン接種に、我々の身体が耐えられるでしょうか?

また、このオミクロン株の特徴についてですが、上気道感染がメインとされています。鼻の奥と咽頭（のど）で強力に増えます。この感染に対抗するためには、マスクと換気が重要です。

マスクは二重にするか、耳にかける紐をクロスして肌との密着性を高めるとよいでしょう。JIS承認の保証付きマスクを使うようにしてください。もちろんN95やDS2などのマスクもお勧めです。換気とは、空気を回すことではなく、一方向への気流の流れを作ることを指します。室内で気流が回っても感染リスクは減りません。上から空気を引く一方向の気流による換気は空気感染のリクスを減らすことができます。

（花木秀明）

Book Introduction

新型コロナウイルス感染症治療に一石を投じる必読の書

「イベルメクチン」

新型コロナ治療の救世主になり得るのか

大村　智　編著

河出新書

抗ウイルス作用のみならず、重症化の原因となる自己免疫の過剰な反応を抑制する作用を持つことが報告されているイベルメクチンは、新型コロナウイルス感染症の治療薬として期待されています。イベルメクチンとは、どのような薬なのでしょうか? また、新型コロナウイルス感染症治療において、どのような効果が期待できるのでしょうか?ノーベル生理学・医学賞の受賞者であり、イベルメクチンの開発者でもある大村 智先生が、イベルメクチンに関する最新の知見をまとめたのが本書です。また、本紙の対談に登場する花木秀明先生、鈑田 徹先生も、共著者として本書に寄稿しています。